琉球大学学術リポジトリ

『大阪球陽新報』にみる「日本人」の指標：移民教育に関する言説研究に向けて

メタデータ	言語:
	出版者: 沖縄移民研究センター
	公開日: 2018-11-13
	キーワード (Ja): 『大阪球陽新報』, 沖縄県出身移民, 教育言説, 生活改善運動
	キーワード (En):
	作成者: 仲村, 紗希, Nakamura, Saki
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010094

移民研究 第 11 号　2016　153-162

『大阪球陽新報』にみる「日本人」の指標
―移民教育に関する言説研究に向けて―

仲 村 紗 希

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．先行研究とそこから考えられる課題
Ⅲ．『大阪球陽新報』における事例
Ⅳ．むすびにかえて ―― 生活改善への回収 /「日本人」像の再生産

キーワード：『大阪球陽新報』，沖縄県出身移民，教育言説，生活改善運動

Ⅰ．はじめに

『大阪球陽新報』とは，1937（昭和 12）年 7 月 25 日に大阪球陽新報社によって創刊された機関紙で，1941（昭和 16）年 2 月 10 日までおおむね月に 2 回刊行されていた。主幹は真栄田勝朗，企画・編集を松本三益がつとめ，国家総動員体制が整えられていくなかで阪神地域へ流入した沖縄出身者（「在阪沖縄県人」）[1] に対し生活改善運動を推奨した。

筆者は『大阪球陽新報』における移民と教育関連の記事を中心に，「日本人」としての基準を反復する言説がどのように生活改善運動に結びつけられていったかを分析課題としている。より具体的に言えば，本稿は「送り出し教育」と「現地教育」の言説を通して構築された「日本人」の指標が，国外という参照枠を通して「在阪沖縄人」の生活改善に持ち込まれた際にいかに強化され，奨励されていったかを明らかにすることが目的である。そのため，本稿では，『大阪球陽新報』に掲載された具体的な事例を紹介する。

ここで沖縄県からの移民の流れを簡潔に述べておく。沖縄県の移民は 1899 年の第一次ハワイ移民によってスタートし，1906 年には 4,670 人が海外移民として流出する。しかし，1919 年から 1926 年までブラジルへの沖縄県出身移民の渡航が禁止されたことや，1923 年にペルーが日本からの契約移民を廃止，ハワイでは 1924 年の「排日移民法」により東洋人移民は完全に排除されることになり，流出先が国内（本土他府県）に転換するが，その後，1930 年代には再び海外移民が増加する[2]。

『大阪球陽新報』においては第 23 号に掲載された「母県発展向上の根本問題検討 / 移民問題・電化問題」[3] などの記事がみられるように，初期の段階から移民先での生活様式が「日本人」とは異なっていること，「外国」からも異なる「日本人」としてみられていることが問題として取り上げられている。また，第 31・32 号の「子供の為の生活向上」にみられるような，国外へ渡った沖縄出身者の生活水準や教育への姿勢を参照例に，『大阪球

陽新報』の教育言説に変換する記事も見られる。前者のような記事（送り出し教育）について，どのような報道がされているか，また移民先における「同化」に関する言説が阪神地域あるいは沖縄県に対する生活改善にもちこまれること，それが「日本人」の基準となっていくことについて取り上げたい。

本稿は人の移動，特に国外移民の教育に関する言説に注目し，その言説が同じ「移動者」である在阪の沖縄出身者にむけてどのように提示されたか，「日本人」の指標のなかにどのように回収されていったかを明らかにするための準備稿である。

Ⅱ．先行研究とそこから考えられる課題

「移民教育」の教育に関する研究は，渡った地における 1 世あるいは 2 世の現地における教育をめぐる問題を中心に取り上げられることが多い。これに対して本稿では，沖縄出身者が「移民」として郷土を離れるにあたって現地で「日本人」としていかに振舞うか，あるいは現地に「同化」しながら「遠隔地ナショナリズム」を担う存在となる過程で必要とされた教育について焦点化したい。移民教育に関する言説，および移民先における沖縄出身者の事例が『大阪球陽新報』の生活改善運動へ還流する際にどのような言説を生み出していったか，という点が問題の射程である。このような移民教育史，特に現地に送り出すにあたって行われた教育に関する先行研究として，小林茂子『「国民国家」日本と移民の軌跡』が挙げられる[4)]。

小林は沖縄移民教育の実践とフィリピン・ダバオでの移民としての自己意識形成という 2 つの局面から，沖縄で移民教育を受けた人々が沖縄出身者としてうける外部からのまなざしに対し「追従」/「対抗」しながら現地での「同化」の過程をとらえるものである。沖縄出身者が抱く日本に対する「差異感」，そしてその反復によって形成される自己認識を，近代沖縄教育史研究，植民地教育研究，沖縄移民（史）研究の 3 つの領域にまたがりながら分析している。したがって著書は第一部「沖縄における移民教育の展開」，第二部「フィリピンにおける沖縄移民の自己意識の形成」の二部構成である。

第一部は資料として『琉球新報』や『沖縄毎日新聞』といった各新聞資料，「新聞集成」の移民関係や教育関係の記事，沖縄県史及び各市町村史，教育雑誌をはじめとする教育関係資料，国や県の出した公的文書が分析対象である。第二部では先に挙げた市町村史や字史に収録された聞き取り調査の証言を一次資料として活用し，当時の日常生活がわかるものとして「仲間喜太郎日記」や全国の元ダバオ移民によって結成されたダバオ会（2001 年に解散）から出された写真集，証言，会報，移民の外的状況やその影響については政府関係資料や会社関係資料，現地で発行された新聞，フィリピンに関連する各種団体の資料が対象である。「戦間期沖縄において展開された移民教育を国・県の移民政策との関連性をふ

まえつつ学校教育，社会教育双方から把握し，その実践を歴史的総体的にとらえる」「フィリピン・ダバオの沖縄移民の意識構造を，移民個人の生活世界から描き出すとともに，政治的経済的な外部状況とを関連させてあきらかにする」という二つの課題に対して[5]，これらの資料を用い教育実践という具体的な活動内容や移民生活など個人レベルの現象と，政策や国際的情勢といった外的状況レベルの現象との相互関連性を追求し，解明するという分析手法を用いている。

小林の研究では移民教育から植民教育へと変質していく過程から，日本に対して抱く「差異感」に依る「必要的同化」と肯定的な自己意識の基盤となる「文化的異化」の志向性が指摘されている。また，フィリピン・ダバオに渡った沖縄移民の自己意識を「日本人意識」と「沖縄人としてのアイデンティティ」という二層の意識構造として捉え，時代状況によって規定され，異なった様相で表出しながら形成されていった過程が明らかになっている。

小林は沖縄の国民更生運動の事例から生活改善について，取り組み内容がとくに海外県外へ出るものにとって必要なものとして受け入れられる側面があったことを指摘する[6]。しかし，現地における移民の実践やその実態の報道や言説が，沖縄県内あるいは他地域の沖縄出身者コミュニティにおいてどのような影響をもたらしたかについて言及されていない。沖縄出身者にとって「日本人」への同化は「生存の方法」であり[7]，教育を奨励する側とそれを受容する側の双方の（必要に迫られた）「同意」により成立し，それは帝国主義的な支配構造のみではない。『大阪球陽新報』という限定された時期と，コミュニティ内部の言説という条件に絞って移民教育の生活改善的側面と「生存の方法」的側面を追究していきたい。

Ⅲ.『大阪球陽新報』における事例

大阪球陽新報社の綱領に「新聞を通じて県内外の連絡統一を図り以て大同団結を期す」「県内外の動静を敏速に報道すると共に立志伝中の人物を紹介し後輩の指導激励を期す」のように[8]，沖縄県の状況や沖縄の外で活動する県出身者を報じる旨が掲げられている。そこで沖縄県移民の様子は『大阪球陽新報』を通して，「在阪沖縄県人」に向けてどのように発信されていたのだろうか。具体的な事例をいくつか紹介する。

1.「母県発展向上の根本問題検討／移民問題・電化問題」の例

中外商事新報資料部長の伊元富爾は，「沖縄県振興事業費」の内容から，他府県に比べ「悪条件」はであるが，「県民の努力の如何に依つて」克服できるとして，以下のように述べる。

沖縄の発展策として第一に考慮すべきことは県民の海外発展，即ち移民の奨励であ

ると思ふ，わが県は他県に比べ経済力の貧弱なることゝいひ，その他官界，政界学界，実業界等各方面を通じて人物が少ないこと，産業が幼稚で県民の生活程度が低いこと，県民の体力が低位にあること等殆ど優勢を誇るべき何物も有してゐない若し強ひて日本一として持出すものがあるとすれば，それは南洋，南米等に於ける県民の進出活躍振りであらう（中略）如何なる困苦にも打ち勝つて行くだけの忍耐力と海を越えて海外で発展することを好む県民の特異性は他県人の到底真似ることの出来ない点である。従つて移民政策はわが県政中の重要項目の一つとして扱ふべきことであつて，例えば県庁に移民課如きものを新設し移民に対する準備教育，移民地の選択，旅費の融通その他についても種々考慮を払ひ移民の保護奨励に対して適当の方策を講ずることが必要であると考へる。[9)]

沖縄出身移民の（この時点における）進出と活躍は評価しながら，「母県」の発展・向上のための課題として，既に「強ひて日本一として持出」されている「移民問題」が挙げられている。

2.「ダヴアオ視察記」の例

「ダヴアオ」に住む「日本人」の半数以上が沖縄出身者であるにも関わらず,「沖縄県人」は「日本人」が中心の社会のなかにおいては周縁化され,「日本人」以外からも「日本人中の別扱」される[10)]。

ダヴアオ銀座と称せられるサンペドロ街に出ると，看板□いふ看板は日本文字である。□亭三□から三□□□は今は響いて居ないけれども，そこに雇はれている此島の小娘達は蓄音機で習得したそうだが，綺麗な声でアゝそれなのにそれなのに，忘れちやいや□などの流行歌を器用に唄ひ在留邦人を慰めて居る。（中略）茲に沖縄県人を忘れてはならない。ダヴアオには九千人にもなつて居るが，現沖縄県人会長上原氏，伊□新助氏，先にも挙げた赤嶺氏など多くの成功者を出して居るが，何処□移民の間でも□る問題がこゝにもある。沖縄県人は生活の様式も，程度も，日本の他県人とは違ふ為め多少感情的にも阻隔を来す。これは南米でも布哇でも到る所□ある問題である。現に我が南洋□管内にさへある。外国では沖縄の人々をオートル・ハボネスなどゝ呼んで，日本人中の別扱をなして居る所さへあると聴く[11)]。

移民先において,他府県出身者との間に「感情的にも阻隔を来」している根拠として「生活様式」「程度」の違いを挙げ,これが現地だけの問題ではないという警鐘をならしている。沖縄出身移民の様子から，（日本国内において展開されていた）生活改善言説に置き換えることができる事例のひとつである。

3.「沖縄移民の品性向上」について

南洋と南米に新聞社を経営していた新城朝功は，南米からの帰途に沖縄出身者の移民先を各地視察し，その活動状況から以下のように述べている。

> 所が私の見て来た限りでは沖縄移民の実情は甚だ面白くない。何処に行つても歓迎されない。勿論事業上に於て抜群の成績を現はしてゐる人もあり，沖縄移民でなければ出来ないといふことも聞いてはゐるが大体に於て排斥されて居るその原因に就ては詳しく申上げることは出来ないが要するに歴史的関係，風俗習慣の関係から来てゐるので決して沖縄移民の質が悪いのではない。詰り沖縄型の風習を海外にまで延長してその儘実行して居るが為めで，結局根本に於ては斯んな移民を出した沖縄の社会状態そのものが非難さるべきである。沖縄には気候風土其他風俗習慣等色々特異性があるが存在するならばそれは断然改革しなければならぬと思ふ。（中略）是等の欠陥は先にも申し述べた如く歴史的関係にも基因するが根本的の欠陥は教育に原因してゐる。諺にも「十年の計は木を植えるにあり，百年の計は人を養ふにあり」とある如く教育家，社会事業家の三省すべき問題で，沖縄移民の改善，誘夜は先づ以て人物教育から出発しなければならぬ[12)]。

沖縄出身移民が排斥される原因は沖縄社会の抱える様々な「特異性」であり，改革の対象であると指摘されている。「欠陥」の根本が教育にあると強調され，教育が改革のための出発点として挙げられている。

4. 子供の教育について

子どもの生活（教育）について，国外へ渡った県民の例を一旦指標にしている記事がある。神戸一中教諭の奥里将健は，以前に北米各地を視察して帰校した開南中学校長の志喜屋考信から直接聞いた，「米国」における「日本国民」の生活について述べている。

> 北米に行つている県人家庭には貧富の如何を問はず，必ずや一基のピアノと一台の自動車が備へられてゐるといふことであつた。一体の自動車は日々の商売道具として別に珍とするには足らないが，千金を投じてピアノを備へてゐるといふに至つては筆者は痛く心を打たれた。米国人が家庭にピアノを備へてゐるから，その生活水準に沿つて自分の娘や息子のためにピアノまで購つてやる，いやピアノばかりではない，子女の教養のためなら彼の地の一般家庭並に，如何なる不如意の経済をも算段して家庭施設を豊富にしてやつて，日本国民としての襟度を発揮しようと努めてゐる彼等同胞の積極的に旺盛な生活力が躍如として偲ばれる。只でさへ有色人を劣等視する白人群

である。万一在米同胞にして衣食住の日々の生活態度に於て，一歩たりともヒケを取ることがあつたら，それこそ日本の恥，県の恥である。彼等は自己の朝夕の労苦は物の数ではない。如何にしたら二世の教育に万全を期し，日本の国威を発揮するかを寝ても覚めても忘れないのである[13]。

また，奥里は次号で以下のように述べる。

一般に五万同胞の人生観とか生活感とかいふものには誤つたものがありはしないかと思ふ。一にも金二にも金，金々でこり固まつてゐることは汎く現代人の通弊であるが，その金が何のために必要であるか，多くの人々に正しい考へがない（中略）現在の職業に対する熱意とか努力とか云ふものが足らず，毎日の生活に全く溌剌さがない。従つて定着性も永遠性も持つてゐない。端た金のためにアクセクしてゐる。自分の精神生活を豊富にしようなどといふことは勿論，第二世の教育方針などに至つては殆ど確立されてゐない。これでは子女教育のためにピアノを購ふといふ在米同胞の心意気など到底判りつこない[14]。

沖縄出身移民と「在阪沖縄県人」の生活状況，特に次世代の教育観について比較している。（伝聞ではあるが）在米と在阪を対比させているため，同時代の在米県人に関する資料と照合させることで，移民と教育の問題と，生活改善言説の連続性を詳細をみていくことができる事例である。

Ⅳ．むすびにかえて ― 生活改善 /「日本人」像の再生産

『大阪球陽新報』に掲載された個別の事例をみていくと，先行研究において指摘されているように差別や偏見に対抗するかたちで，基層部分に「沖縄人としてのアイデンティティ」をもちつつも，差別に追従し，表層部分には日本人意識を内在化させ，二層の自己意識を使い分けて日本人社会に適応し生き抜いていった[15]。このような二層の自己意識は，生存の方法として機能するが，自己意識を使い分ける，もしくは両立させるたびに沖縄出身者は自己の内部に存在する「日本人」（「日本人」という自らの規定）により「差別」「偏見」という暴力に曝されている。

事例のなかでは言語や歌舞音楽，精神上の問題によって沖縄移民は「大体に於て排斥されて居る」が[16]，それは「歴史的関係，風俗習慣の関係から来てゐるので決して沖縄移民の質が悪いのではな」く，「沖縄の社会状態そのものが非難さるべきである」と主張されている。それは，沖縄の「特異性があるが存在するならばそれは断然改革」することで，「異なる日本人」ではなく，移民先の社会に受け入れられるような「日本人」を目指す教育の必要性を語っているのである。沖縄県当局は「那覇市に …… 移民訓練所 / 糸満市 …… 漁

民道場 / 四万四千円の予算で」[17]，「県に拓務課を新設 / 八月から移民訓練所も開始」[18]，「国頭郡金武村に移民訓練所 / 毎年指導者一百名養成」[19]，とあるように沖縄出身の「移民」としてふさわしい「人物教育」を展開するために尽力していく。

日中戦争期の教育では国体観念の涵養と同時に，国防国家体制に即した国民を育てることにも力が注がれ，広田内閣時代の 1937 年に実業界から文部大臣になった平生釟三郎は，国防力の充実や生産力拡充のために義務教育年限を延長することを主張した。これは総力戦にそなえてより優秀な兵力や労働力として国民を教育するためのものであったが，女子教育も同じ文脈において「女子の教育を高めることは絶対必要」なもので，「家庭的にも社会的にも女は男の片棒を荷わなければならない」と語られる[20]。北米における沖縄出身者のように「必ずや一基のピアノと一台の自動車が備へ」る必要があるのではなく，「日本国民としての襟度を発揮」するためには，どのような経済状況にあろうとも，周りの生活水準に合わせた教育を行うことによって「日本の国威を発揮」できるということを主張している。「日本の恥，県の恥」は「在阪沖縄県人」にも置き換えられ，次世代の教育にどれほどの力を注ぐことができるか，ということが「日本国民として」の生活改善であることが強調されている。

今回補足資料として，『大阪球陽新報』に掲載されている移民・教育関係の記事の一覧をまとめた（表 1）。今後個別の記事の分析から，一般論と『大阪球陽新報』の，あるいは生活改善運動においてみられる限定的な言説を分ける。また，その限定性と意味の分析し，『大阪球陽新報』の各地域の事例から，渡った地域ごとの条件の差異が「日本国民としての」基準を設定する際に書き手が，あるいは読み手が重視しているかを考察する。即時性をもたない，しかし指導的な性格を持つ新聞に，「成功者」としての沖縄県移民が紹介されること，そこで報道される移民社会あるいは対外社会との接合、同化について言説から分析して「送り出し教育」と「現地教育」の言説を通して構築された「日本人」の指標を明らかにしていきたい。

注

1）『大阪球陽新報』において，沖縄出身者を表す言葉は「沖縄人」「わが県人」などいくつかある。「在阪沖縄県人」と「在京県人」との違いについて，ここでは詳細な議論は控えるが，「沖縄人」「全県民」および「在阪」という呼称は予め対置されている「日本人」によって規定され，様々な外的要因によって「沖縄」が日本の一地方に還元されない，日本である一方で日本ではないという宙吊りの領域であることを示していたのではないだろうか。本稿において，宙吊りにされた領域に存在する「日本人」であろうとしながらも「沖縄」であることを余儀なくされるという矛盾を孕む存在であった，特に阪神地域に移り住んだ沖縄出身者に関して「在阪沖縄県人」という語で表記する。

表 1　移民・教育関係記事

日付	号	見出し	備考
1937年9月1日	3	布哇の県人指導者　ドクトル小波津氏帰朝	
1938年8月1日	23	母県発展向上の根本問題検討/移民問題・電化問題	執筆者：中外商業新報資料部長　伊本富爾
1938年8月15日	24	沖縄発展の鍵は　教育の刷新と生活の改善から	執筆者：沖縄県知事　淵上房太郎
1938年9月1日	25	教育問題と人物の養成	
1938年11月1日	29	沖縄移民の品性向上に就て	執筆者：リマ日報社長　新城朝功
1939年1月1日	31	人物養成の急務/専門校以上の教育に全力を傾倒せよ	
1939年2月15日	33	十八歳未満入国禁止/ブラジル移民資格変更	
1939年3月15日	35	沖縄移民発展史(一)/沖縄県人は南洋開拓の恩人/ダヴアオ邦人の七割は県人	
	35	海外移民募集開始海協が積極的斡旋/渡航乗船無料取扱	
	35	移植民教育のため県下に訓練道場	
1939年4月1日	36	沖縄移民発展史(二)/驚嘆すべき努力/赤道直下・大和魂の顯現	
1939年4月15日	37	沖縄移民発展史(完)/市場の花“糸満娘”名売子と好評嘖々	
	37	県出身布哇移民の郷土視察団/団長は安里永秀氏	横濱ホテル館主　津嘉山氏特信
	37	花嫁さんも混り比島移民勇躍出発	横濱ホテル館主　津嘉山氏特信
1939年5月1日	38	苛酷な生活をしてゐる南洋の移民/根本的対策要望	
	38	南洋事情座談会で/南洋直通航路と移民の向上要望	
1939年7月20日	42	沖縄は移民王国/全国で第一位	
1940年2月15日	55	那覇市に……移民訓練所/糸満市……漁民道場/四万四千円の予算で	
1940年4月1日	57	布哇生れの二世等が豪華な母国観光団/約一ケ月に亘り各地の各所旧蹟並母県を訪問	
	57	在京県人有志の布哇観光団を歓迎会	
1940年4月20日	58	娘婿へのお土産/布哇から拳銃を持参島尻出身の婆さんが	
1940年5月1日	59	布哇生れの二世/大城君が力士志願で来朝	
1940年6月20日	61	県に拓務課を新設/八月から移民訓練所も開始	
	61	楽土南洋を語る/製靴，洋服職人が有望県出身教育者も欲しい	トラツク島県人会長　大嶺会録氏談
1940年8月5日	63	横濱ホテル主人津嘉山氏の美学/物故移民慰霊祭に県へ金一円寄付	
1940年9月15日	66	県外に出る前に準備教育を施せ	執筆者：弁護士　豊川忠進
1940年11月1日	68	国頭郡金武村に移民訓練所/毎年指導者一百名養成	

2）向井清史『沖縄近代経済史』（日本経済評論社，1988 年）153 頁。

3）1938 年 8 月 1 日『大阪球陽新報』第 23 号 7 面「母県発展向上の根本問題検討 / 移民問題・電化問題（中外商業新報資料部長伊本富爾）」

4）小林茂子『「国民国家」日本と移民の軌跡 ― 沖縄・フィリピン移民教育史』（学文社，

2010 年）

5）それぞれ前掲『「国民国家」日本と移民の軌跡 ― 沖縄・フィリピン移民教育史』10-11 頁から引用。

6）前掲『「国民国家」日本と移民の軌跡 ― 沖縄・フィリピン移民教育史』148 頁。

7）現段階で「生存の方法」という語は，近代日本社会編入以降の沖縄が「同化」を志しながら，幻想の「日本人」像に対して達成されることのない「同化」を繰り返す過程そのものが，県外へ渡った沖縄出身者の生存戦略であったのではないかという意味で使用している（意味・説明要検討箇所）。

8）眞榮田之琛 編『球陽』（大阪球陽新報社，1938 年）1 頁。

9）前掲「母県発展向上の根本問題検討 / 移民問題・電化問題（中外商業新報資料部長伊本富爾）」

10）屋嘉比収は「オートル・ハボネス（オートロ・ハポン）」=「別の日本人，変な日本人」を沖縄の他者性を企てとして取り出し，「国民」に対する異質性や国家の位相とは異なる発話の位置の可能性を指摘している（岩崎稔・大川正彦・中野敏男・李孝徳『継続する植民地主義 ― ジェンダー / 民族 / 人種 / 階級』8（青弓社，2005 年）115 頁）。

11）1937 年 5 月 15 日第 3 号 2 面「ダヴアオ視察記（元漢口総領事駐米大使館参事官　須磨彌吉郎）」

12）1938 年 11 月 1 日第 29 号 1 面「沖縄移民の品性向上に就て（リマ日報社長 新城朝功）」

13）1939 年 1 月 1 日第 31 号 6 面「子供の為の生活向上（上）（神戸一中教諭 奥里將健）」

14）1939 年 1 月 15 日第 32 号 1 面「子供の為の生活向上（下）（神戸一中教諭 奥里將健）」

15）前掲『「国民国家」日本と移民の軌跡 ― 沖縄・フィリピン移民教育史』187-188 頁。

16）1939 年 5 月 1 日第 38 号 1 面「苛酷な生活をしてゐる南洋の移民 / 根本的対策要望」など。

17）1940 年 2 月 15 日第 55 号 3 面。

18）1940 年 6 月 20 日第 61 号 2 面。

19）1940 年 11 月 1 日第 68 号 2 面。

20）永原和子『おんなの昭和史』（有斐閣，1986 年）81 頁。

史料

大阪球陽新報社『大阪球陽新報』（1937 年 7 月 25 日 —1941 年 2 月 10 日，全 73 号）
眞榮田之琛 編『球陽』（大阪球陽新報社，1938 年）

文献

移民研究会 編『日本の移民研究 ― 動向と文献目録 I 明治初期 —1992 年 9 月』（明石書店，2008 年）
――――『日本の移民研究 ― 動向と文献目録 II 1992 年 10 月 —2005 年 9 月』（明石書店，

2008 年）
伊豫谷登士翁 編『移動から場所を問う — 現代移民研究の課題』（有信堂高文社，2007 年）
浦添市教育委員会 編『浦添市民史』（浦添市教育委員会，2015 年）
岩崎 稔・大川正彦・中野敏男・李考徳『継続する植民地主義 — ジェンダー / 民族 / 人種 / 階級』（青弓社，2005 年）
大門正克『戦争と戦後を生きる』（小学館，2009 年）
沖縄県教育委員会 編『沖縄県史 1　通史』（国書刊行会，1989 年）
小林茂子『「国民国家」日本と移民の軌跡 — 沖縄・フィリピン移民教育史』（学文社, 2010 年）
辻本雅史 編『知の伝達メディアの歴史研究 — 教育史像の再構築』（思文閣出版，2010 年）
永原和子『おんなの昭和史』（有斐閣，1986 年）
名護市史編さん委員会『名護市史本編・5　出稼ぎと移民 I　総括編・地域編』（名護市役所，2008 年）
向井清史『沖縄近代経済史』（日本経済評論社，1988 年）
屋嘉比収『沖縄戦，米軍占領史を学びなおす — 記憶をいかに継承するか』（世織書房，2009 年）
吉原和男 編『人の移動事典 — 日本からアジアへ・アジアから日本へ』（丸善出版, 2013 年）

論文・その他

神繁 司「ハワイ・北米における日本人移民および日系人に関する資料について（1）」（『参考書誌研究』第 47 号，1997 年 3 月）1-49 頁
————「ハワイ・北米における日本人移民および日系人に関する資料について（補遺）」（『参考書誌研究』第 67 号，2007 年 10 月）17-39 頁
森 明子「大都市と移民 — ベルリンにおける『外国人』カテゴリーと『多文化』意識」（『国立民族学博物館研究報告書』第 30 号（2），2005 年）145-229 頁
吉田 亮「『越境移民』研究史の課題と方法 — アメリカ合衆国日本人移民のストラテジー」（『日本の教育史学 — 教育史学会紀要』第 47 号，2004 年 10 月）214-221 頁

（なかむら　さき・大阪大学大学院文学研究科博士課程前期・日本学）